

## 完成から80年、待望の世界初演！ 大澤壽人作曲《ピアノ協奏曲第一番 イ短調》(1933年)

生島 美紀子(大澤プロジェクト代表 神戸女学院大学非常勤講師)

戦前は欧米で、戦後は日本で活躍した作曲家・指揮者、大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)は神戸生まれ。今年で没後60年となるが、その音楽活動は近年ようやく全貌が明らかになった。47年の短い生涯に、作品総数は作曲・編曲合わせて1000近く、圧倒的な創作力は「天才」の呼び声が高い。

急逝後忘れられていた大澤が、藤本賢市氏と片山杜秀氏によって再び世に出たのは21世紀に入った頃。その後、代表作CDが文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞を受賞し、今聴いても斬新な音楽が一挙に関心を集めた。

飯守泰次郎氏指揮による関西フィルハーモニー管弦楽団は、2005年に「時代を超えたモダニズム」を開催、独奏に迫昭嘉氏を迎えて《ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲》を演奏。以来、大澤の作品を意欲的に取り上げている。飯守氏は現在、大澤作品を最も多くレパートリーに入れた指揮者であり、すぐれた理解者である。

《ピアノ協奏曲第一番 イ短調》は、関西学院を卒業して米国に留学した大澤が、26歳でボストン大学に提出した卒業作品。日本人作曲家による最古のピアノ協奏曲の一つで、1933(昭和8)年5月の完成時には、クーセヴィツキ指揮ボストン交響楽団で初演の可能性があったが諸事情で実現せず、丸80年を経た本日、待望の世界初演を迎えた。完成の翌6月には、日本人として初めてボストンポップスオーケストラを指揮するなど、米国で才能が開花した大澤の華やかな留学期を代表する作品であると共に、大作を得意とした作曲家の原点を成す。

総譜126頁に及ぶ「急一緩一急」の3楽章は、日本的な情緒や祭りを思い起こさせる一方で、20世紀前半の西洋音楽の不協和な響きを取りこまれ、和洋が深いレベルで融合する。《第一番》は、パリで発表された《第二番》や帰国後の《第三番 神風》とは個性が異なるが、瑞々しい力量感にあふれる。作曲を習い始めて僅か2年8ヶ月、しかも戦前に、この独創的な協奏曲を創作した大澤の冴えは驚くばかりである。

### 第1楽章：やや速く戯れるように

祭り囃子の様な短い音型で開始され、この第1主題が終始変容してゆく大規模なソナタ形式。続く第2・3主題も日本的で、前者は終楽章と関連して、循環形式風な統一感を楽曲に与える。

### 第2楽章：ややゆっくりと優雅に

形式は3部分に分かれ、冒頭、ピアノが独白の様な無調の動機を提示し、日本の音階による旋律が続く。祭り囃子の断片の様な付点リズムが登場して華やかさを増してゆく。静かに始まる中間部はやがてピアノとオーケストラとの掛け合いとなり、再現部ではピアノが豪華にかけ巡る。

### 第3楽章：間奏曲と終曲 中庸の速さで神秘的に

「間奏曲」は最弱音に始まって終曲を導き、軽快な「終曲」はA-B-A-C-Aロンド形式。リズムが息つき次々と楽想が繰り出され、エネルギーあふれる楽章で、終曲部にはピアノに当時最先端の「トーンクラスター」(手の平で奏して沢山の音を鳴らす)と、独特の「グリッサンド」(両手を交差させて鍵盤上を滑らす)が登場する。

尚、今回の初演に際しては、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」より自筆譜複写が提供された。